

●二人で味わう古典和歌 (102)

東人の荷前の箱の荷の緒にも妹は心に乗りにつけるかも

久米禪師

『万葉集』巻二、久米という法師が石川郎女という女性と結婚した際に互いに交わした五首のうちの末尾の一首。

「東国人の荷前の箱の荷を縛る綱のように、あの子は私の心にしかと食い込んでしまったよ」。荷前とは、朝廷へ奉る貢ぎ物のうちその年の最初の分。ゆえに、荷の緒は念入りに固く縛ってあったにちがいない。身動きできないほど相手に心を囚われている様子が、食い込む綱の痛みの感覚とともにリアルに伝わってくる。

「妹は心に乗りにつけるかも」というおもしろい言い回しは人気だったようで、集中に六首も同じフレーズの使われた歌を見つけることができる。「背子は心に〜」などという例はなく、男性限定の表現だったようだ。

宇治川の瀬々のしき波しくしくに妹は心に乗りにつけるかも
卷十一・柿本人麻呂歌集

漁りする海人の楫音ゆくらかに妹は心に乗りにつけるかも
卷十二・作者未詳

どのように妹がわれの心に乗ったのか。そのバリエーションは多様である。一首目では「宇治川のあちこちの瀬ごとくに立ちしきる波、この波のように、あの子はひつきりなしに私の心に乗りかかってきて消え去ることがない」と。二首目では「漁をする海人の櫓のきしみ、その音がゆつくり聞こえるように、じわりじわりとあの子は私の心に乗りかかってきて離れようとはしない」という。宇治川のほうは、あとに続く歌群から片恋を嘆く歌だとわかる。波立つ勢いのままにはやる心が攫われている様子。漁りのほうは、旅先での一夜妻を思う歌。はじめは深い思いなどなかったはずなのに、次第にだいに相手の存在が心に滲むように思われてならない様子は、故郷に置いてきた妻への愛情とは質のちがう思慕であろうことが想像される。

妹が心に乗っている状態。もはや自分の意志ではどうにもならず、心の手綱を握られている精神状態を表すフレーズとして非常に説得力がある。

(小島なお)